

島崎藤村『海へ』論

——「渡仏体験」における〈旅〉と〈海〉の意義——

細川 正義

一

『海へ』が実業之日本社から単行本として刊行されたのは大正七（一九一八）年七月一〇日、藤村がフランスの旅を切りあげて帰国し、芝二本榎西町の兄広助のもとに旅装を解いたのが大正五（一九一六）年七月八日であったから、帰国後ほぼ二年を経ての刊行であった。ただし、執筆は帰国後まもなくから始められ、五章で構成されている各章は、執筆年順に示せば、

「故国に帰りて」（第五章）大正五年九月五日～十一月一九日『東京朝日新聞』

「海へ」（第一章）大正六年四月「中央公論」

「地中海の旅」（第二章）大正六年六月、一〇月、大正七年二月「中央文学」

「燕の如く帰る」（第三章）大正六年九月「中央公論」

「故国を見るまで」（第四章）大正七年四月「中央公論」

となっていて、帰国後二ヶ月足らずの、まだ感慨さめやらぬ印象を綴った「故国に帰りて」から大正七年四月の「故

国を見るまで」の、ほぼ一年半を費やして書きつがれたものを、単行本刊行に際して、いわばフランス体験の三年間を間に挟んだ形で、往路と帰路の紀行文として整理したものである。

藤村のフランス体験については、渡仏中に書かれ、後に『仏蘭西だより』⁽¹⁾としてまとめられた「平和の巴里」「戦争と巴里」があり、或は『新生』『エトランゼ』でも具体的かつ詳しく取り上げられている。『海へ』は表題が示すようにそうしたフランスでの生活には具体的には触れず、まさに海の紀行文として、「身についた一切のものを捨てることによって、漸く船に乗るところまで動くことが出来た」(『海へ』一)という切迫した出発時の心境から、日本を離れるに従って海の色が「黒ずんだ藍色」(『海へ』三)から次第に明るさを増していき、やがて「海は微笑んだ。明るい海があつた。」(『海へ』十)というように癒しを感じるようになる一方で、「船室の床板に額を押宛て、泣いても足りないほどの悲痛を感じ」(『海へ』十)たとも記すような内奥を責めさいなむ苦渋を実感しつつフランスへ向かつて行つた往路、そして、戦争も含め激しいパリ体験と伝統を重んじる重厚な古都の文化に触れる事によって、「私はお前を見た眼で、もう一度自分の国の都を見直したいと思ふ。なんと言つてもわれ／＼の国はまだ若い。私は若い日本を夢見つ、遠くこれから帰つて行かうとして居る。」(『燕のごとく帰る』二)と故国への郷愁と期待とを抱いての帰路を(『海』との対話のなかで描いたものである。

藤村文芸における渡仏体験の意味を探る上で、帰国直後の最も鮮やかな印象の中で書かれた『海へ』の各章を注目するのは必須であるが、本論にはいる前にまず触れておかなければならないのが、言うまでもなく藤村の渡仏の決意の背後にあるこま子とのいわゆる(『新生事件』との関連である。藤村が姪こま子の妊娠を知らされて、深い後悔と罪意識の中で「眼に見えない編笠、眼に見えない手錠、そして眼に見えない腰縄」⁽²⁾をつけられた囚人の心持で愛する故国を捨て、子供達からも、一切の生活からも離れて逃れるようにフランスへの旅に立った経緯は『新生』で詳しく触れている。

その『新生』と『海へ』の執筆時期で言えば、『海へ』は帰国後、フランスの客舎で途中までしか書きあげることの出来なかった『桜の実の熟する時』の続稿と平行して書かれ、大正七年四月に最後の「故国を見るまで」が発表された直後から『新生』の稿が起こされている。そのように『海へ』各章は、いわばフランス体験を中枢にしてその「強い嵐」の前に佇立する孤独な岸本像を描いた『新生』の序の章にもあたるべき時期に書かれたにも拘らず、（特に往路を描いた「海へ」「地中海の旅」が格調の高い表現でまとめられているのが印象的であるが）亀井勝一郎が、

・彼に若さを回復せしめたのは彼の批評精神ではなかったか。その批評精神は同時に彼の詩精神にむすびつき、異邦人としてのロマンチズムをも発生させた。極めて渋いかたちではあるが再び「若菜集」のしらべがあらはれる。

・「海へ」は紀行のかたちで書かれた散文詩とみてもよい。

として、海を渡る旅を契機にして再び甦ってきた詩精神によって『若菜集』の頃の抒情の調べが見事に形象されているといった評価を与えているように⁽³⁾、苦渋の実感を旅人としての漂泊の調べに委ねた形で表現していきながらも、『新生』で告白したこま子との痛恨の出来事の一切を旅人としての心情の内側に包み隠してしまった文章に仕立てあげている点は見逃せない。

重ねて言えば「海へ」「地中海の旅」に描かれた、フランスへの旅を急いだその往路にあつては、藤村にとって実際は『新生』で描いたように、こま子とのことを告白して後事を託すべきこま子の父である兄広助宛の手紙がどうしても書けず「上海を去って香港への航海中」⁽⁴⁾になって漸くしたためることが出来た、そうした辛酸を抱えての旅であつたし、フランスでの生活においても国から次々送られてくるこま子の、愛情にすがろうとする切々とした手紙に心を悩ませていたわけである⁽⁵⁾。或いは帰国後も「故国に帰って」の執筆と前後して、あれほど悔恨と苦悩を重ねてフランスまで逃れていったにもかかわらずこま子とのインセストも再開されている。『新生』執筆の決意に至つてい

ない時期に、そうした暗い実生活を一切隠蔽する形で『海へ』各章の筆を運んだことは当然と言えば当然であるが、しかし『海へ』の最終章「故国を見るまで」とは並行した形で『新生』の稿が開始されている点から考えても、こま子との一切を包み隠したまま旅情を詩的表現に委ねていく方法では少なくとも帰国後の実感を十分に表現し得ないことは痛感していたであろうことも推察出来る。『海へ』の解明にあたってはそうした〈新生事件〉に対する藤村の躊躇と脅えを見逃しては、例えば先に亀井の言葉を引用したような詩情表現も正確には理解することが出来ないであろう。

その点従来の山田晃氏⁽⁶⁾、和田謹吾⁽⁷⁾等の『海へ』論が、藤村の〈新生事件〉体験を底流にしていることとの対比で論じられているのは首肯出来る。確かに、

・私は身体が寒いばかりでなかった。心が寒かった。漸く自分で自分の身体を堅く抱き締めるやうにして、心覚えの道を辿つて行つたことを思出すことが出来る。丁度私が細れて来た世界とは、彼様いふ眩暈と戦慄との出るやうな寂寞の世界だ。そこにあるものは降り積もる『生』の白雪だ。そこはまるで氷の世界だ。氷の海だ。そして私はその氷の海に溺れた。(『海へ』二)

・私は一切のものを忘れたかった。愛する日本を忘れたかった。あの憐れな世紀の焦燥を忘れたかった。私は自分の暗い心が、多くの失望に失望を重ねた悲しい社会的の経験からも来て居ることを白状せずには居られない。

(『海へ』四)

といった暗澹とした心情告白が、旅情という擬装の内がわに〈新生事件〉を想起させる印象を与えることは言うまでもなく、和田は、『海へ』に描かれた渡仏の途にある藤村と、その〈新生事件〉との関連に対し

こま子の胎内に新しい生命の芽が育ちつつあった時の自然描写として読めば、おそろしいほどの迫真力をもった藤村自身の心理描写でもあったことが納得できるであろう。

と述べている⁽⁸⁾。しかし、そのように旅の描写と実体験を重ねて読むならば、「一切のものを捨てて」「(海へ)」「生きた屍」(二二)のごとき暗い実感の中で日本を離れていった旅が、「故国に帰れて」で

私の仏蘭西の旅は実に失敗に終つて了つた。私は外聞のいかにも得意気なるに引きかへ、孤影悄然として懐しい故国の港へ帰り着いたのである。(七)

と述べざるを得なかった藤村の内実を見れば、一つには、この段階で『海へ』が告白し得た言説の範囲で言えば、「国を出る頃は、あの浅草新片町の方にあつた書齋を巴里に移す位の無造作な考へであつた」(七)にも拘らず、巴里の客舎では思いがけない体験や発見もあつて予定していた創作も思うように進まず、多くの約束の何程もはたせず、家族にも心配ばかりかけてきたという心情があつたことは事実であろうが、更にその内奥には、帰国後、かつてあれほど深い後悔と悲痛を味わい、苦渋の三年間を忍従してきたにも拘らず、再びこま子との関係が始まり、またこま子とのことで負い目を背負うことを余儀無くされた中で生じた兄広助との金銭問題も含め、一層逃れるすべの無い実生活上の暗さに囚縛されていることへの深い痛恨の実感があつたことも見逃すことは出来ない。

そのように、『海へ』はやがて『新生』の告白に向うべく必須のテーマを内包しつつ、その暗い秘密への脅えと痛恨の緊迫した心情を内に抱きつつあくまでも海の旅の詩情で整えて表現しているところに『海へ』が格調の高い紀行文の体を成し得ている根拠を見出し得るといえるのであるが、あらためて言うまでもなく、『海へ』の各章が実生活との対比の中で『新生』の序章的視点のみで言及されるのではなく、そうした内的心情におけるリアリティと、一方『海へ』執筆で作者が意図的に構築しようとしたテーマの形象関係を論じなければ作品論として成立し得ないわけだ、ここでは実生活の重さを抱えつつ、それを隠蔽することに周到に気配りしている点と、フランスでの三年間の生活の内実に一切触れないで往還の旅情に限定した形で丹念に描いていこうとしているところに着目し、「若い日本を夢見つ、」「(燕のごとく帰る)」「(お前の日の出が見たい)」「(故国に帰りにて)」「(二十)」という方向性を強調する『海

へ』において、おそらくそれは亀井がもう一点指摘している（批評精神）に通じるものでもあろうが、その点において主人公が旅によって何を獲得し、何を期待して故国を目指そうとしたのかという点にも注目していく必要がある。

二

帰国後の身辺整理も忙しい大正五（一九一六）年九月五日から「故国に帰りて」の発表が開始されている点から、『海へ』の各章は往還の旅情を懐旧の情で追憶するだけでなく、以後も反芻され整理される余地はあるものの、帰国後の藤村のフランス体験に対する最も鮮やかな感慨と認識を綴った文であると言えるのであり、中でも次の一文は特に注目される。

私が旅に出た時分から見るとお前は一層黙つて了つたやうな氣もする。お前の声は奈何したらう。何時迄お前は其様に沈黙を続けて居るのだらう。（故国に帰りて）二十

「お前」とは隅田川の水であり、故国日本である。三年ぶりに帰国するに際し、再び、「往昔、多感多情な詩人が口づきの紅い都鳥を見て情人の生死を尋ねた歌を」残したその歌を再び聴くのを楽しみにしていた。しかし、数年ぶりに帰ってみると「白魚が死に」、「都鳥が飛去つたやうに」、隅田川に情緒をもたらせていたなつかしい声は聞えなくなつてしまっている。しかしこれからも永久に「お前の詩が涸れ果てようとは奈何しても思われない」、お前はいつたい「何時迄」「其様に沈黙を続けて居るのだらう」、お前から「溢れて来る詩を知りたい」と問いかけている。

藤村が体験したフランスでの三年間は、『新生』で回想されるように戦時下の緊迫した危機的状況に直面して、けつして安穩なものではなかった。しかし滞在中の心境を書いた『仏蘭西だより』に描かれた藤村の印象は、崩壊の危機に直面したバリの混乱を目の当りにしながらも、それを暗さの実感によって受けとめているのではなく、そうした

困難と動搖の中にあつても伝統を堅持し、忽ちに激しかった戦争禍を修復して新しい息吹を感じさせていくフランス民族に対する驚嘆と憧憬に基づいたものであつた。帰国の途についた藤村が、伝統に培われたフランスの、そして西洋の力強さを目の当りにした眼で三年ぶりに見る故国に対して「僕には自分の国が矢張一番好い」（「故国を見るまで」十七）と言ひ、過去の記憶に憧憬の思ひを重ねて〈美しい夢〉を抱いていた心情、それは当然、帰国を促した心情にもつながるものであり、その〈美しい夢〉が故国日本の新しい方向への希望と決意をもたらせたことは首肯できる。そこには、故国日本への信頼と希望、例えば多くがヨーロッパに植民地化されていった東洋の歴史の中で、そのはての小国島国でありながら、中世以来の歴史の蓄積や封建秩序、そしてその封建時代に対して、父親を含めて〈時代〉を支えてきた人達の努力によつて曲りなりにも独立国を守り、文化や伝統を築きつづけてきた、そうした日本に対する信頼と希望があつたことも推察できる。

『新生』では藤村は、パリの客舎で岸本に幽閉の自己認識とともにそこにいたつた暗い運命の糸を父親の生涯に遡源させて反芻させているが、見方をかえれば、異国の地にあつて、混乱と危機の戦時下のなかでも永々と営まれる伝統堅持のエネルギーに接した藤村が、一方で日本を外から見ることによつて改めて認識した父の時代とそれによつて保たれている現在の日本を、その西洋、特にフランスでの伝統の重さへの感動に重ねて、故国の伝統の有りようの確認にまで拡大して受けとめていた証左として見ることも出来る。それが『新生』の中でも岸本の帰国を促せた重要な内因の一つとして描かれているが、『海へ』ではこのことがより明確に意図的に示されているところに〈批評精神〉を明確にして描こうとする『海へ』の執筆意図を探る手懸りを見る必要もあるが、具体的には次のように示されている箇所が目される。

・つく／＼私は仏蘭西あたりにある欧羅巴のクラシカルな文明を、クラシカルでそして同時に近代的なあの大きな包容の力を羨んで来た。それだけ私は自分の国のほうのことを考へ続けて来た。何一つ日本に好いものがある

か、何一つ世界に向つて誇り得るものがあるか、と言ふ海外在留の同胞に邂逅めぐりあふ度に、吾儕は左様いふ破壊の思想から自分の国を護らねば成らないと思つて来た。

左様だ、吾儕日本人はまだく保守的だ。吾儕に必要なことは国粋の保存でなくて、国粋の建設でなければ成らないのではないか。吾儕はもつとく欧羅巴から学ばねばならない。そして自分等の内部なかにあるものを育てねば成らない。(「故国に歸りて」十七)

・幸ひにも僕等の国には中世があつた。封建時代があつた。長崎が新嘉堡に成らなかつたばかりぢやない、僕等の国が今日あるのは封建時代の賜物じやないかと思ふよ。見給へ、日本の兵隊が強いなんて言つても、皆な封建時代から伝はつて来たものの近代化だ。(略)どうかすると僕は旅に居て自分の国のことを考へて、まだ前世紀が自分等の中に生きて居るやうな氣のすることもある。眞実ほんとうに自分等は革命といふものを経て来たのか知らんと疑ふやうなこともある……(「故郷を見るまで」十一)

この二箇所の引用文で「自分等の内部なかにあるもの」という表現が「封建時代の賜物」の表現と呼応するのは言うまでもない。藤村は西洋が、自らの伝統を重んじ、その伝統に立脚して更に「国粋の建設」に活発に動く近代化へのエネルギーを内包しているのに対し、徳川幕府の長い鎖国政策の弊害でもあるが西欧に対して脅威を抱くばかりでまともに直視し対峙することをせず保守の姿勢ばかりでおそろおそろ近代に進み出ようとしている自国の近代化への未熟さの認識を指摘し、一方ではたとえ日本がフランス人のように「クラシカルな文明」を同時に近代的なものに変える伝統堅持と近代化へのエネルギーに成熟し得ていないとしても、その日本がけつしてフランスや西欧に劣っているばかりではなく、一方では「僕等の国が今日あるのは封建時代の賜物」であるという、西洋のそれに比すべき歴史と伝統を有していることを誇るべきであることを強調している。帰国を急ぐ主人公に抱かせた故国日本に対する〈美しい夢〉とは、そうした「自分等の内部にあるもの」の発見の体験がもたらせた日本に対する信頼と更にその「内部にあ

るものを育て」ていくことへの期待に基づいた心情を表現した言葉でもあったといえる。

しかし、『海へ』が往還の旅情の中核の一つにフランス体験がもたらせた故国の伝統の発見に対する認識をおいてゐるのは重要であるが、一方で注目しなければならないのは、本稿の二の冒頭に引用した「故国に帰りて」の箇所であり、或いは

日本——三年の異郷の旅にある間、一日も私の心から離れることのなかつた日本——その故国の方へ近づけば近づくほど、遠く旅窓で私の胸に描いたものは美しい夢のやうに消えて行きかけた。信じがたいほどの孤独と無刺激とが左様した美しい夢を生んだのかと疑はせるやうに成つて行きかけた。愛あるものの胸に闘ふ幻滅ほど悲しいものはない。その愛が切なければ切なるだけ、余計に悲しみを増して来る。私は早やその矛盾に陥りかけた。と言つて、それを奈何することも出来なかつた。（「故国を見るまで」十六）

の箇所のように、伝統の再発見による〈明〉の認識に対して、三年ぶりに接した現実の日本が与えた〈暗〉の認識としての幻滅の実感を反復して表現している点であろう。ここで〈新生事件〉との関連でいえば、「お前は一層黙つて了つた」（「故国に帰りて」二十）の表現の背後には、広助のもとに旅装を解き、家族や、次々と訪れる旧知の友人に対してフランスのみやげ話に話はずむ藤村を、家族の背に隠れるようにして寂しそふに見つめるこま子の姿を重ねることも、あるいは「遠く旅窓」で胸に描いた期待が夢のように消えて行きかけたという表現に、苦渋のこま子との関係の復活を重ねてみることも可能ではあろう。しかし、繰り返し言えば、『海へ』構築のテーマとして藤村が意図したのは、祖国の文化と伝統に〈美しい夢〉を抱いて海路の心をせき立てた夢が、現実の日本の姿に接して脆くも崩れ去つた寂寥と幻滅の実感を反芻することにあつたことは見逃してはならない。更に言えば、四章の「故国を見るまで」の中で、主人公に対する主人公の幻影としてのエトランゼエの言葉として示された

・『兎に角、僕は君にこれだけのことは言へる。まあ君がこれから国の方へ帰つて見たまへ。自分の国が自分の国

のやうでは無くなるでせうよ。』(二)

・『幸か、不幸か、君も海の洗礼を受けてしまった。』(五)

の箇所が示すように、帰国後の藤村を襲った深い幻滅の実感は、いったん西洋の文化と伝統の価値観の洗礼をうけて帰国した者が必然的に背負わなければならないものであったという認識があったことも忘れてはならず、帰国後最初のまとまった仕事として、祖国への〈美しい夢〉と希望を抱かせたフランス時代の生活への追想ではなく、往還の旅情に限定して「故国に帰りて」から筆をとっていった藤村の、『海へ』執筆の意図は、西洋と日本の懸隔の距離をはかりつつ、希望を持って帰国した直後に抱かせられた幻滅と寂寥の心情を強調しつつ、一方ではそれ故にこそ新の近代化をはたしえた「若い」日本の「日の出が見たい」と切望する心情を重ねる事にあつたといえよう。

三

『海へ』がフランスへの旅から帰国した藤村を襲った日本の文化、伝統に対する深い幻滅の実感を主調音に構成されている点を、帰国後も早々にこま子との暗い生活が再開されていった実生活における痛恨と関連させて、その暗い主調音の理由に〈新生事件〉への脅えを指摘することは可能である。しかし、それはあくまでも『海へ』が内包する主調音の暗さのリアリティに関連させて考えるべき視点であって、『海へ』各章が〈新生事件〉にまつわる実生活を巧みな粉飾によって隠蔽しつつ、帰国後の藤村を幽閉していった寂寥と旅の功罪に絡ませて反芻しようとしている意図を求める上で、或いは『桜の実の熟する時』の結構からやがて『新生』発表を必然化していく過程として、藤村が『海へ』執筆の中で自らの芸術営為に対する問題をいかなる形で凝視しているかを探る上では、更に『海へ』の各章の表現に立ち入って丹念に分析していかなければならないが、その一つとして一章で繰り返し語られているデカダン

スの問題が考えられる。

例えば次の箇所である。

實際斯の面白さうなことで満されて居る世の中に、光と、熱と、夢の無い眠より外に願はしいことも無いとしたら、どんなものだらう。丁度私はそれに似た名状しがたい心持で、二週間ばかり床の上に震へて居たこともある。(『海へ』二)

この箇所がモウパッサンの『水の上』の表現に仮託した形で表現されたものであることは早くに田山花袋の指摘があるが⁽⁹⁾、この文章にも窺えるように、『海へ』一章がこのような主人公の深いデカダンスに囚縛された心情を伝えることに注意を払っていることは注目される。花袋の指摘のようにそれが作者の「淋しい孤独な生活の上に起った重苦しい感じ」を伝えていることは、言うまでもなく『新生』発表と同時に明らかにされていった妊娠事件とも呼応するものでもあるが、更に注意しなければならないのは、その〈海へ〉の旅に救いを求めなければならないほど切迫したデカダンスがこま子から妊娠を告げられる以前、或いはこま子との暗い関係が生じる以前から派生していた病巣であるとしている点であらう。

・新片町にある小樓の壁からも春の焰が流れて来て居た。三年も私が凝視めたのはその壁だ。

・斯の小樓に住居を定めてから最早七年ばかりに成るが、自分の周囲にあつたもので減じるものはだん／＼減びて行つてしまつた。(『海へ』冒頭部)

藤村が浅草区新片町一番地の〈小樓〉に住居を定めたのは明治三十九年(一九〇六)一〇月である。それから四年、フランスの旅にのぼる三年前というと明治四二、三年頃と考えられ、丁度『家』の執筆と時期を同じくし、加えて言えば明治四三(一九一〇)年八月には妻冬子が産後の出血多量の為に死亡しており、藤村が『海へ』の中でモウパッサンやボードレールの言葉を用いて「光と、熱と、夢の無い眠」と言い、「多くの悲痛、厭悪、畏怖、艱難なる労

苦、及び戦慄」『海へ』(二) と言っている苦渋の実感が⁽¹⁰⁾、単にこま子との関係が生じたことによる痛恨よりも以前の『家』執筆前後の状況を指しているのはそうした年譜との関連でも見ることが出来る。その『家』執筆時期の藤村が、それまで「観察」を「武器」に進んできた自らの創作の方法が『家』執筆途上に於いて、その方法では処理不可能な、観察主体である自己の存在をも脅かすほどの時代の暗さと諦念に遭遇し、芸術の方法の限界と行き語りを痛感させられた深い焦燥と孤独、そして妻の死、そのような中でいかに困難な寂寥とデカダンスに陥っていたかを示すものとして更に明治四五年四月の『日光』を取りあげることがある。

・ 実際の面白さうなことで満されて居る世の中に、光と、熱と、それから夢のない眠より外に願はしいことも無いとしたら、奈様なものだろう。

・ 多くの悲痛、厭悪、畏怖、艱難なる労苦、及び戦慄は、私の記憶に上るばかりでなく、私の全身に上った——私の腰にも、私の肩にまでも。⁽¹¹⁾

この『日光』での言葉が、先に引用したように『海へ』で再び繰り返して用いられているわけだが、言い換えれば『海へ』の中で、色濃く窺えるデカダンスを語る時、藤村が脳裏に浮べていたのは、『家』執筆直後の芸術上の沈滞に直面して深い寂寥と焦燥に心労を重ねていた状況を示した『日光』執筆前後の焦燥の時であったと推察出来るのである、少なくとも『海へ』の、ストーリーとしては主人公の海外逃亡を促せていった病巣を、そのように『家』執筆直後に藤村を襲った芸術上の行き詰りと沈滞から生じた懊悩の状態に遡源させて考えようとしていることになる点は注意しておく必要がある。

繰り返して言えば、『海へ』では、日本脱出を促したものとして、こま子の妊娠にまつわる暗い実生活への痛恨よりも、藤村の認識としては芸術上の沈滞、実生活の沈滞、或は小林一郎が指摘するように「教えることはあっても、教えられることのないことを痛感」⁽¹²⁾させられる、年齢からくる新鮮さに対する喪失感、そうしたものからもたらさ

れる幽愁とデカダンスをより切実な内因に見ていたということにもなるが、それが「故国に帰りて」で具体的に描かれる帰国後の日本への「何時迄お前は其様な沈黙を続けて居るのだらう。」（「故国に帰りて」二十）という問いと幻滅体験を必然化していく形で統一され、詠嘆の主調音を一層リアルに形象するように構成されていることを指摘することが出来る。それは例えば故国を離れていく主人公を〈巡礼者〉に見たてて筆をはこぶ設定からも窺えるし、「私は心の漂泊者でした。巡礼者でした。」（「地中海の旅」三）、「旅は私に巡礼者の心を与へた。」（「故国に帰りて」五）と繰り返しながら、孤高の漂泊者として国を離れていく主人公の心象風景と呼応させた形で海の変化を綿密に描写していく視点からも想像できる。この海の描写の卓越さは亀井勝一郎の指摘にもあつたように作品の詩情表現をよりひきたてることになっているが、この克明な海の描写で作者が見据えているのは、上海から香港、支那海へと場所の変化に従って刻々と変化する海の色と様子を綿密に描いていくことによって、日本からの距離を確認し、その距離の懸隔をはかりつつ、一切のものを捨てて一人遠い孤独な旅に向う姿を鮮明にさせることであつたといえよう。そのように一場面ごとに日本との距離を隔てていくことを明示している海の変化と、それ故に輪郭が明確にされていく人物設定、そうした投影法を用いることによって、一切の身に背負う日常での長年のしがらみを捨て、沈滞の苦渋の実感だけを抱いて旅の途上にある主人公を一層リアルな形で孤高の〈巡礼者〉に限定することに周到に注意を払っている点に作品の意図と方向を読みとることも出来よう。或いは小林が指摘しているように

もう友達からも遠かつた。すべてのものから遠かつた。T君等の身の辺ばかりでなく、長い年月の間自分を取巻いたあのいそがしい骨の折れる生活からも。三十代か四十代で人が老い朽ちなければ成らないやうなあの過度で齷齪とした心づかひからも。（「海へ」七）

と記された一章の言葉が、日本の自然主義者達と一線を画していく宣言でもあり、更には同じ一章で『藁草履』の頃を回想して反省されている「観察」を「武器」としてきた自らの芸術の方法の一切をも捨てざることを意図したものの

即ち、フランスの旅が失敗であったと告げる「故国に帰りて」を中心にして窺える帰国後の実感は、そうした沈滞と寂寥に誘引された、旅の途上にある〈巡礼者〉としての設定と合せて考えるなら、例えば

と述べているように、「観察」を「武器」としてきたそれまでの創作方法を拭い去ろうとして困難な旅にのぼったに

も拘らず、長年身についた習性は一朝一夕では取り去ることは出来なかつたという痛恨に根ざしてゐたであらうし、フランスの客舎で内なる父の存在を激しく憧憬し、父の時代の人達が蓄積してゐた力によつて今日の自分があるという発見に出会つた主人公にとつて「真実に自分等は革命といふものを経て來たのか知らんと疑ふやうなこともある」の言葉が象徴的のように（旧いもの）を脱ぎ去るのは容易ではなく、そうした否定の方向ではなく、むしろ逆に（旧いもの）の重さとその意義を肯定し、改めて深く認識する方向において旅の成果を確認することになつたことを示していることが窺える。或いは『新生』の岸本の言葉をかりれば、

$$(14)$$

と語った箇所が印象的なように、人に言えない罪の自覚の中で心奥に「冷たい汗」を流しつつ、一刻も早く、一切から逃れていきたいという心情を暗澹とした現状の一切を捨てて切迫した心情の中で「脇目もふらずに海の懷へ急」「海へ」二ゝぐ旅人の心持に託して癒しと休息と回復の願いを求めて渡仏してきた。しかし、その旅を終えた心情を綴った「故国に帰りて」の中でも

・何よりも先づ私の願ひは楽しい休息にあつた。(一六)

・休息、休息、他に何も私は願ひが無い、唯休ませて欲しいと思つた。(十五)

と嘆息を重ねるように、結局フランスへの旅では現実を否定し逃避するそうした消極的、他者依存的な選択においては、真の《休息》を得ることは出来なかつた、言い換えれば旅によつて慰藉と《休息》を得て《心の革命》をなさうとした旅であつたにも拘らず、その目的においてはそうしたものはついに得ることが出来なかつたという痛恨の思いと、むしろそのことを肯定的に確認する姿勢を内包しているということも出来る。阿毛久芳氏は

往路復路の旅上を書くことが、心に革命を起こす実践の試みということになる。

と指摘しているが^阿、渡仏に託した思いがごとく否定され、むしろ否定されたということそのものを肯定しそこから出発していくという構図においてこそ『新生』執筆を前にした『海へ』の意義を確認できるともいえよう。

そのように見てくれば、『海へ』は、《新生事件》という身を切られるような事実に牽引された形で、『家』執筆以後藤村の内面を徐々に蝕みつつあつた沈滞と寂寥のデカダンスが急速に一切の情熱を擲め取つていた、そうした切迫した状況の中にあつて、一切のものをから逃れ、《休息》を得て新しい再生の光を希求して旅立つたにも拘らずその方向においては《心の革命》ははたせず、幻滅と挫折感の中で依然として暗い《冬の季節》に身をおいているという詠嘆の心情を抒情の調べに託して表白することを一つの姿勢として持つていたことが注目できる。更に言えばその姿勢をとつた方向においては、往還の旅情を五つの短篇で綴つた『海へ』は、明治四五年前後の暗澹とした状況にまで遡源させて内なる暗さの病巣を凝視しようとした視点の中で、多様な要素を内包しつつも、作品全体を統一体として、その状況下を《冬の季節》に限定し、執筆を通して反芻することを意図した作品であつたということも出来よう。

そうした《冬の季節》の状況設定という視点でいえば、デカダンスからの脱出慰藉を求めている旅立ちの事情に対して、帰国後の心情は更に深いデカダンスにとらわれ、詩を歌う声を失つた日本に接し失望を抱きつつもそれでも「遙

か川上の方から渦巻き流れて来るお前の水が有るかぎり」「故国に帰って」(二十)それを信じ「若いお前」に希望を失わず再生、あるいは新生への期待をその失望の中から立ち上がらせることを企図していることが窺えるのである。

例えば「故国に帰って」の中で

・生活の興味といふものを復た喚返した丈でも、旅は私の役に立つた。(十八)

・私は若いお前を夢みつ、それを頼りにして遠い旅から帰って来た。何となくお前の水はまだ薄暗い。太陽の光線はまだお前の岸に照り渡つて居ないやうな気がする。お前の日の出が見たい。(二十一)

としている箇所である。藤村が作品世界を〈冬の季節〉に閉じ込め凝視することによって〈春を待ち望む心〉を浮出させようとする方法を常套手段とする作家であるのは、『春』以来明確に窺える姿勢であるが、渡仏体験を幻滅と寂寥の〈冬の季節〉の実感の中で反芻することを意図した『海へ』の方法にもまたそうした藤村の〈春を待ち望む心〉を基調にしたテーマを読み取ることは可能であろう。ただ、そのように〈春を待ち望む心〉を『海へ』の〈冬の季節〉の舞台設定の上に読みとるとしても、そこが最後の章である「故国に帰って」においても一章で旅に着く前の心境として語られた一切の情熱と興味を喪失させるデカダンスの砂漠の状況のままであつては、春の到来を待望し得る〈冬の季節〉とはなり得ないわけで、その意味においても、たとえ消極的描写ではあつても、旅の成果として「生活の興味といふものを復た喚返した」「お前の日の出が見たい」とした表現は重要である。

初めにあげたように『海へ』は最終章の「故国に帰って」をまず発表し、以後「海へ」以下の章が発表されていったものを「故国を見るまで」執筆後全体を一作品としてまとめたものである。藤村の新生待望の手法で言うなら、帰国後の旅への幻滅の実感を繰り返しつつ、〈春の季節〉の到来を待望する心を書き添えていく「故国に帰って」が『海へ』全体のテーマを集約的に語っているともいえるが、旅立ちから往路を描いた一章で嚴寒の〈冬の季節〉と旅立ちへの内迫した心情を反芻し、以後旅立ちを迫った嚴寒のデカダンスと、旅は失敗であつたとする認識を両極にし

つつ、旅の成果を旅情の詠嘆に託して問いつづけていった各章が、「故国に帰りて」の認識と希求の視点に丁度包含され、その認識から希求への構造を見事に必然化している点に藤村の卓越した手腕と、『海へ』が帰国直後の幻滅と寂寥と、昂揚の発芽に複雑に揺れる旅の後遺症を整理して、やがて『新生』に向うべき視点を獲得していく重要な位置に立つ作品となり得ているといえるのである。『新生』では次のように記されている。

過ぐる三年、罪過の苦痛に悩まされつゝけた岸本のみましきはしきりに不幸な姪を呼んだ。その時になつて初めて彼は節子に対する自分の誠実^{まこと}を意識するやうに成つた。長い懊悩も、憂鬱も、忍耐も、寂しい異郷の独り旅も、すべては皆この一つを感知するために有つたかのやうに思はれて来た。⁽⁴⁶⁾

換言すれば、旅の三年間を懊悩と憂鬱と忍耐と寂寥の旅であつたと規定し、その心境を反芻することによつて〈新生〉の燭光を可能にしようとする視点である。即ち『海へ』で確認してきた旅の経験は、その旅自体は〈心の革命〉としては有効ではなかつたし、そうした具体的な成果においては旅は失敗であつたとする認識であつたかもしれない。しかしそこを〈冬の季節〉として凝視することにおいてこそ〈新生〉の燭光を浮出させる不可欠の地点になりうるのであり、そこに「日の出」を可能にする旅の往還の心境を綴つた作品『海へ』の真の意義が見出しうると捉えることができるのである。

(1) 註

(1) 『仏蘭西だより』大正十三（一九二四）年九月、新潮社。初出は『平和の巴里』大正四（一九一五）年、佐久良書房、『戦争と巴里』大正四年十二月、新潮社で、それぞれ『平和の巴里』が大正二（一九一三）年八月二十七日から大正三（一九一四）年五月三十日まで、『戦争と巴里』が大正三年九月十八日から大正四年八月三十日まで「東京朝日新聞」に発表されたものである。

(2) 『新生』一卷四十一、大正八（一九一九）年一月（『藤村全集』七卷、九二頁）。

- (3) 亀井勝一郎『島崎藤村論』、新潮社、昭和二十八（一九五三）年十二月、一五八～一五九頁。
- (4) 『新生』一卷五十一（『藤村全集』七卷、一〇九頁）。
- (5) 『新生』一卷八十七（『藤村全集』七卷、一六九頁）では、節子から来る便りを読んだ岸本を「彼は罪の深いあはれさを感じるばかりでなかった。同時に言ひあらはし難い恐怖をすら感ずるやうに成つた。」ととらえている。
- (6) 山田晃「海へ・エトランゼ」『国文学』学燈社、昭和四十六（一九七二）四月号
- (7) 和田謹吾「島崎藤村『海へ』旅と再生」『国文学』学燈社、昭和四十八（一九七三）七月号
- (8) 和田謹吾、註(7)に同じ（引用は『島崎藤村』、翰林書房、平成五（一九九三）年十月、一九九頁）。
- (9) 田山花袋は「花袋紀行集」第三輯の「諸家の紀行文短評」の中で『海へ』について、
「島崎君の『海へ』は、モウパッサンの『水の上』を思はせる作だ。（略）『水の上』では、モウパッサンの肉体から放散したやうな熱い重苦しい気分を嗅ぐことが出来るが、『海へ』には作者の淋しい孤独な生活の上に起つた重苦しい感じを受けることが出来た。」と述べている。
- (10) このことについては、藤村の考えが窺えるものとして「このごろ」に次のように記している。
『自分はもう考へまいと思ふけれども、どうしても考へずには居られない』と『水の上』の作者は歎息したとか。『光と、熱と、夢の無い眠りの願ひ』とは物を深思するといふよりも寧ろ物を考へまいとする人の苦痛から出た言葉であらう。
〔文章世界〕大正元（一九二二）年十二月号、後『後の新片町より』大正二（一九二三）年四月に所収、『藤村全集』六卷、一二二頁。
- (11) 『日光』『柳橋スケッチ』、『中央公論』明治四十五（一九二二）年四月号、後『微風』大正二（一九二三）年四月に所収
〔藤村全集』五卷、三四九頁と三五二頁）。
- (12) 小林一郎『海へ』論『島崎藤村 課題と展望』明治書院、昭和五十四（一九七九）年一月、三九二頁。
- (13) 小林一郎、前掲書、三九三頁。
- (14) 『新生』一卷四十三、（『藤村全集』七卷、九六頁）。
- (15) 阿毛久芳『海へ』『解釈と鑑賞』平成一四（二〇〇二）年十月、至文堂、一二八頁。
- (16) 『新生』二卷五十三、大正八（一九一九）年十二月（『藤村全集』七卷、三三二頁）。